

映評

ジョニー・デップ・出演／アンドリュー・レヴィタス 監督

『MINAMATA- ミナマタ』

TC エンタテインメント / 2022年2月発売 / 1時間55分 / 3,418円
ASIN B09MQKV1W5評者：浮網 佳苗
同志社女子大学 表象文化学部

今年9月27日、大阪地方裁判所は水俣病をめぐる訴えに対する判決を下した。この裁判は、水俣病の症状があるにもかかわらず、患者救済のための特別措置法（2009年施行）から対象外とされた住民が、国と熊本県、原因を作り出した企業を訴えていたものである。大阪地裁は、原告の訴えを全面的に認め、国などに合計3億5000万円の賠償を命じた。この裁判が示すように、水俣病は決して過去のものではなく、現在も続いている公害のひとつなのである。

いわゆる四大公害のなかで最も早く被害が社会的に認知され、そして被害者が最も広範にわたることで知られる水俣病は、その深刻さを訴える地域住民と、その責任をなかなか認めようとしない国や県、企業との戦いの歴史でもある。そもそも、原因物質を特定するまでに相当な期間を要しており、被害を受けた住民たちの苦しみは想像を絶する。

本作はこの歴史について、水俣病で苦しむ住民の姿を撮影し世界にその事実を伝えたアメリカ人写真家、ユージン・スミス（William Eugene Smith, 1918-1978年）とその妻アイリーンを中心に描く。スミスを演じたのは、言わずと知れたハリウッドのスター、ジョニー・デップである。それゆえ、映画公開当時の2021年9月、日本国内において話題になったこともあり、すでに鑑賞した方も多いのではないかと思う。本作はまさに、化学物質が暮らしに与える影響を知るうえで、その原点を教えてくれる貴

重な作品である。

ユージンは、写真家であり、かつ写真を通じて社会の問題を世に広く知らしめるジャーナリストとしての役割も担っている。水俣を訪れる前は、戦争の悲惨さを写真におさめることに力を注いでいた。しかし、沖縄戦で負傷しその後遺症に苦しむなかで、酒浸りの日々を送る。そのようななか、ユージンが所属する雑誌出版社が水俣病の取材を彼にもちかけた。また同時期に、富士フィルムのCM撮影にて当時通訳のアルバイトをしていたアイリーンと出会う。アイリーンとともに水俣を訪れたユージンは、病気で苦しむ人々の姿に衝撃を受けるとともに、この事実を記録に残したいと奮闘するが、やはりこのことを良く思わない、企業関係者や住民との対立も描かれる。

例えば、ユージンが、有機水銀を海に垂れ流しているチツソ株式会社（以下、チツソ）の社長に話を聞くシーンは印象的である。社長は浄化装置を導入し、有機水銀を安全である微量にまで低減したので問題ないと豪語する。そして、「私はその水を飲んだ」とまで言い張る。いまの原発処理水の状況と重なってしまい、なんとも複雑な気持ちにさせられた。さらに質の悪いことに、社長はユージンのネガフィルムと交換条件で、大金を彼に渡そうとする。自分たちがやっていることに自信があれば、そんな必要はないはずだ。やはり当人たちもまずいことをやっているという自覚があるのだろう。他にも、

ユージンを良く思わない人々からの仕打ちをうけることになるが、それが写真を現像する小屋の放火やチッソ従業員による暴行として描かれる。もっとも、上述の賄賂を含め、こうした出来事がどこまで事実を反映しているのかは様々な議論があるようだ。とはいえ、そこはハリウッド映画。多少の脚色はあるかもしれないが、暗く深刻なテーマを扱いながら、見る者の心にくぐりと迫る、至極のエンタテインメントに仕上がっている点は圧巻である。



映画の一場面
(毎日新聞 2021/9/25 <https://mainichi.jp/articles/20210925/k00/00m/040/068000c>)

一方で、水俣という地域は、チッソで働く者も多く、地域の雇用を生み出していた側面もあり、住民の複雑な思いもあったのだろうと推測される。しかしながら、この映画では、住民の思いや活動を深く掘り下げることはしておらず、もっぱらユージン・スミスの視点が中心となっている。この点はやや残念だが、それに関しては水俣の住民目線で製作された邦画を参照されたい。この映画によって水俣病について詳細な部分まで学べるわけではないが、この映画を入り口として水俣病をはじめ、日常における化学物質の及ぼす影響への関心につながればと願う。

水俣病の原因物質を作り出していた企業は、現在も操業を続けているが、いまではもちろん有害物質の処理については厳しい監視のもと、地域の雇用と生活のために取り組んでいるそう

だ。しかし、だからといって、日本では克服された問題だということは違うであろう。冒頭に述べた裁判は現在進行形の話であるし、水俣病に限らず、農薬や食品添加物、日用品に含まれる化学物質など、日常に潜むその他さまざまな化学物質によって人々の健康や自然環境を害する事態は現在も起こり続けている。

エンドクレジットでは、福島第一原発をはじめ、チェルノブイリ、サリドマイド薬害、鉛汚染、殺虫剤、ダイオキシン、ヒ素など、世界の有害化学物質による被害の事例がいくつも紹介される。水俣病は確かに、世界の人々に化学物質の負の側面をまざまざと見せつけ、衝撃を与えた。化学物質は私たちの生活を豊かにした側面はあるが、しかし同時に、たくさんの脅威をも生み出してきた。そして、その被害は未だに世界中で起こっている。

この映画の一番の盛り上がりといっても過言ではないシーンについては、あえて触れないが、そのインパクトたるや言葉に表せるものではない。現在、Netflix などの各種動画配信でも鑑賞することができるので、より多くの人に届いてほしい作品である。

なお、ユージンの元妻（のちに離婚した）、アイリーン美緒子スミス氏は、現在、京都で原発に反対し、環境保護に取り組む団体「グリーンアクション」の代表として、変わらず活動をしている。評者は大学院生のとき、この団体の手伝いをしていたことがあった。アイリーン氏はとても気さくで明るい方だったが、同時に社会を良くしたいという熱意に満ち溢れ、どんな困難にも屈しないエネルギッシュな女性という印象であった。当時は評者自身、彼女と水俣の関わりについてそれほど詳しいわけではなかったので、この映画から彼女の活動の原点にユージンと見つめた水俣の風景があったことを深く知り、非常に感慨深くなったことは述べておきたい。